

平成 27 年度第 15 回講演会 記録

日 時	平成 27 年 11 月 28 日 13:00~16:00
会 場	国民会館
講 師	京都大学フィールド科学教育研究センター長 吉岡 崇仁 先生
演 題	森里海連環の科学と社会
備 考	参加者数 129 名 記録 中垣 尚治

1. 講義の概要

「森は海の恋人」という、心が揺すぶられる名キャッチフレーズに代表される森里海連環学で、森から海までの生態系に影響を及ぼす物質について、淡々と科学的に調査された結果を発表された。

一方、人の自然に対する意識や認識（環境意識）によって自分の考えや行動を判断しており、この人文社会学的な問題を科学的に調査した内容についても発表された。森里海連環学は両者を融合させて考える学問であるが、特に人の意識・行動に起因する人文社会学が難しいことを改めて知った。



2. 科学的調査

海に影響を及ぼす因子として、硝酸塩 NO_3^- （窒素飽和）と有機物 DOC（溶存有機態炭素）の量を、川上の溪流から海までの量を調査した。結果は人間活動の激しい所から硝酸塩が沢山出ており、東日本・西日本の森林は窒素飽和している。硝酸塩と DOC は反比例相関があり、森林が多い場合や再生が進むと DOC が多く硝酸塩が少なくなる。水質調査をすると陸上生態系の変化が分かる。

また海の生態系に影響のある鉄錯体の量を、由良川流域で調査された結果も報告された。結果は、森林から供給されるよりも耕作地や市街地などの土地利用の方が多というデータになった。

3. 人文社会学からの調査

「Not in my backyard」の話がされた。“うちの裏庭でなければいいけど・・・”の環境意識の「うち」と「そこ」の問題。いわゆる“総論賛成、各論反対”が大きな壁となっている。環境に対する意識は、全てを把握できては訳ではないので、その人の履歴や立ち位置により様々である。

いろんな事例の紹介があったが、例えば国産木材でも家の柱や内装に対する関心と、割り箸などの間伐材に対する関心とでは大きな差がある。その他の事例紹介があったが割愛する。

4. 感想

科学的探究については理解がしやすいが、人文社会学の項になると言われる内容は分かるが、変革や実行については非常に難しい内容が横たわっている。森里海連環学は「里」問題（人の意識・行動）に尽きるのではないかと感じる。この課題に、多くの事例や研究成果をもって、地道に啓発していくことが重要であると思った。

最後に先生から、「学ぶ」とは“情報を知ることか？”との問いがあった。“知る”という事の意味は、「情報を得て、自らが変わる」ことである。“君子、豹変する”ことの正しい意味を理解し、今後の行動を考えて欲しいという言葉で締められた。